

# キリスト教系高齢者福祉施設における 文化活動と『つながり』の生成

——旭ヶ岡の家（函館市・カトリック）の  
実践から学ぶ——

柴 田 謙 治\*

## はじめに—研究の背景と目的, 課題, 方法

### (1) 研究の背景と目的, 課題

日本で1980年代以降「地域福祉」が推進されたこともあり、地域で暮らす当事者が差別されず、地域住民に理解され、受け入れられるために「つながり」を創る、という課題が浮上しているが、一部の良心的なワーカーを除くと、多くの社会福祉協議会の職員はさまざまな背景により、アメリカで生まれた「コミュニティ・オーガニゼーション」やイギリスで発展した「コミュニティワーク」を用いてこの課題に取り組むのには至っていない。

そのため筆者は社協職員による実践に固執せず、社会福祉施設が地域で暮らす当事者と地域住民との間につながりを創る可能性に注目し、本稿では特に文化活動に着目したい。入所施設のなかには居住環境やサービスの水準などが不十分なところもあり、解体への潮流もみられるが、福祉施設

---

\* 金城学院大学現代文化学部教授

の建設への反対運動をきっかけに「施設の社会化」に取り組み、入所者と地域住民のつながりが生じたところもあるなど、「福祉施設と地域社会」の経験を掘り起こすことでつながりを創る方法のヒントが得られるかもしれない。

## (2) 訪問先と方法、若干の仮説

本稿では、福祉施設が当事者と地域住民のつながりを創り出すためには、「人権と人格性の尊重」という実践者の価値観が不可欠であり、キリスト教系の社会福祉施設の方がそのような価値観を前面に出しやすいと考えたため、北海道函館市にあるカトリックの総合施設「旭ヶ岡の家」にご協力いただいた。秋山等が指摘したように、キリスト教社会福祉には上述のような価値観を重視できるという長所だけでなく、科学性と専門性の限界、社会的な視点の欠如と権利思想の弱さ、保守性、非近代性、世襲制や創設者等の独断などによる「私物化」などの短所もある（秋山・吉井 1998: 148-9, 164-5）。そのため訪問にあたっては、上記の長所を備え、短所を克服したキリスト教系の社会福祉施設を探した。

同志社大学系のクリスチャン・ソーシャルワーカーを輩出したプロテスタントに比べて、現代の社会思想に直接の関係を持たず、記録・文書等が未整備で、「事業そのものが目的となり、一般の社会福祉施設の運営と変わらないものになっていないか」、「全体を把握することが困難である」、「専門職の養成と訓練が不十分である」という課題を指摘されたカトリックではあるが（田代菊雄 1989: 81-2, 85, 田代不二男 1983: 105, 132-3）、総合施設「旭ヶ岡の家」は、上述の基準を充たした実践をおこなっているため、ご協力いただいた。

筆者が、「福祉施設と地域社会」の研究をおこなううえでの基本的な仮説は、「地域住民と当事者の人格的交流を通じて、『自分がその立場だったら』という『身につまされる思い（共感）』が芽生えることで、差別と偏

見をもつ地域住民の価値観が人格と人権の尊重へと転換する」というものである。ただし総合施設・旭ヶ岡の家を設立したフィリップ・グロード(Philippe Gourraud)神父の著作を読むと、旭ヶ岡の家は高齢者福祉施設であり、市民運動から作られたこともあって、上述の仮説の検証を試みるよりも、「文化活動」を通じて日本の貧しい福祉観を変えた可能性がある、という仮説を得た。前述した筆者の「福祉施設と地域社会」についての仮説では、当事者と地域住民の人格的交流をすすめる「媒体」が欠落していたが、それが文化活動であることに気づかせていただいたのである。

筆者は2010年の12月9日に旭ヶ岡の家を訪問して研究の趣旨を説明して協力を依頼し、グロード神父の著作の分析と訪問で感じたことをもとに本稿を執筆した。2011年2月4日には再度旭ヶ岡の家を訪問し、研究成果の公表について同意を得て、機関誌の「それいゆ」のバックナンバーをお貸しいただいたが、その結果は「函館市におけるキリスト教の伝道と社会事業の伝統」の分析も含めて、別の機会に執筆したい。グロード神父様と市毛晋様、そして旭ヶ岡の家の皆様に、お礼を申し上げたい。

本研究は、金城学院大学キリスト教文化研究所の研究プロジェクト「キリスト教系社会福祉施設による文化活動の宣教的可能性—北海道函館市の旭ヶ岡の家(カトリック)の文化的プログラムと地域住民の価値観」の一環としておこなわれた。金城学院大学の皆様にも、感謝申し上げます。

## I 旭ヶ岡の家の歴史と概要

### (1) 旭ヶ岡の家ができるまで

特別養護老人ホーム・旭ヶ岡の家は、「これから高齢者への対応が重要になる」と考えた市役所の厚生部長が老人ホームの建設を依頼したことをきっかけとして、神父と信者、市民の協力によって設立された、函館市内

で2番目に長い歴史のある特別養護老人ホームである。1960年代初頭の函館には貧困な家庭が多い地区があり、信者たちはビンセンシオ・ア・ポロ会を結成してそこに児童館を建て、子どもにかかわる活動をした。グロード神父はその活動をすすめるなかで「函館カトリック社会福祉協会」を設立し、理事長を務めた。そして家庭訪問先にも一人暮らしの高齢者が増えてきて、この人たちに何かできないかと話し合っていたところに、市役所から声がかかったといわれている（グロード 1996: 45-7, 社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 5, 25, 33-5）。

前述のように、カトリックの福祉活動では信徒主導よりも聖職者主導のケースが多いと思われるが、上述のような信徒による自発的なアソシエーションが存在し、先行して活動していたことも、市民によって旭ヶ岡の家が建設される原動力になったのではないかと推察される。なかでも教会の函館地区長であったケヌエル神父が、3つの教会の信徒会役員に特別養護老人ホーム建設の話を切り出したことがきっかけとなって、協会病院のケースワーカーを退職して特別養護老人ホーム建設のために奔走し、道庁と折衝した佐々木淑枝さんのエピソードは興味深い。また信徒たち一人一人も近所の商店や知人、友人を回って募金を集めたところ、寄付を求められた側もいやな顔をせず聞いてくれ、寄付を断られたことはなかった（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 35-6, 39）。

1976（昭和51）年にはカトリックの信徒だけでなくプロテスタント、そして財界も協力して建設期成会が結成され、月に2回のペースで会議を開く熱心さもあって、1年少々で9,000万円の募金が集まった。ただし後述するような夢を実現するためにはそれだけでは費用をまかなえず、募金と同じくらいの借金もした。建設期成会はその後援会となり、北海道民を中心に1700～1800名の登録者から毎年1,000万円近くの寄付金が集まった、といわれている（グロード 1986: 94-5, 99, 社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 44, 47, 49, 74, 138）。筆者が函館を訪れた際にも市民の方か

ら、当時特別養護老人ホーム建設運動がテレビで報道され、市民に知られるようになった、というお話をうかがった。

## (2) 特別養護老人ホーム・旭ヶ岡の家の特色

特別養護老人ホーム・旭ヶ岡の家は1977（昭和52）年に、3,000万円で購入した6万6千平方メートルの土地に建てられた。当時周辺には民家も少なく、人口も100人に満たなかったが、1975（昭和50）年から旭岡団地の造成が開始されて人口が増え、旭岡町と西旭岡町の人口は6,000人へのぼるようになった（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 38, 18, 15）。民家が密集している地域に後から福祉施設を建設する場合には、住民の反対にあうことも少なくないが、旭ヶ岡の家の場合には老人ホームが先にあり、後から民家が増えた、という関係である。

旭ヶ岡の家は函館市の郊外の丘の上にあるが、人里離れたところにある、ノーマライゼーションに反する入所施設、という印象は受けなかった。むしろ、ヨーロッパの山上に築かれた古城の、市街地を見下ろすようなたたずまいを連想させられた。旭ヶ岡の家からは函館市内と海を見渡すことができるため、かつての自分の家や地域に住んでいなくても、いつでもそこに目をやることのできる、という位置にある。

そして筆者は、旭ヶ岡の家を訪問するまでは通常の「特別養護老人ホーム＝入所施設」というイメージをもっていたが、広大な土地に旭ヶ岡の家と後述するその他の建物、そして巨大なイエス・キリスト像、ルルド、池と和風の橋、展望台などが建てられているのを見て、「入所施設」というよりは「老後を心地よく過ごすためのコミュニティ」という印象をもった。

グロード神父は措置制度の不名誉さを経験していたので、ホームをベニヤ板の世界にしたらお終いであると考え、それまでの救貧的な福祉ではなく、家よりいいところで、家族とのつながりがあるホームをめざした。グロード神父は、21世紀の日本で残る老人福祉施設は専門性の高いナーシ

ングホームとケア付きアパートであり、老人ホームは住宅であると主張した（グロード 1996: 184, 109, 社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 182, グロード 2002: 206, 50）。この主張は、その後のコミュニティケア論や居住福祉論を先取りしている。

老人ホームはケア付きの住宅であるという主張は、「一人ひとり主義」という個別性を尊重する思想に根ざしており、自分だけの空間である個室の確保として実現されていった。旭ヶ岡の家の設立時には、定員77人に対して個室は18室だったが、個室の定員に対する比率は1977（昭和52）年の10.4%から、1981（昭和56）年には23.1%、1987（昭和62）年には29.9%、1991（平成3）年には33.7%、1999（平成11）年には57.8%と高められ、2007（平成19）年に4室を個室にして62.7%になった。また2人部屋を個室として使用するなど、採算よりも人権を尊重した工夫により、7割を個室にした<sup>1</sup>。また、「個室」が「孤室」にならないように、寝室である個室の外に後述するような多様な楽しみの機会が設けられている。個室化をすすめるにつれて、入居者間のトラブルが少なくなり、入居者と家族の人間関係が充実し、ターミナルケアもやりやすくなって、ホームの雰囲気が悪くなった、といわれている（グロード 2002: 190, グロード 1986: 175, グロード 1996: 22, 25, 社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 206-14, 201）。

筆者が旭ヶ岡の家を訪問した時にも、相部屋が醸し出す入所施設的な雰囲気は感じられず、広々とした廊下はホテルのような印象—高層建築のホテルのような無機質な感じではなく、西洋風の居心地の良いヒュッテに近い印象—を受けた。

### (3) 総合施設・旭ヶ岡の家へ

特別養護老人ホーム旭ヶ岡の家が設立されてから14年後にあたる1993（平成5）年には、当時の特別養護老人ホームのような措置制度に基づい

た施設ではなく、高齢者との契約による特定有料老人ホーム「レジダント」がケア付きアパートとして、隣接して設立された。当時このような施設は全国に8箇所しかなかったが、特別養護老人ホームの入所者が高齢化し、余暇活動への参加が困難になったため、レジダントに住む元気な高齢者に特別養護老人ホームの入所者と交流してもらい、その方たちに特別養護老人ホームの活動にも参加してもらうことで全体を活性化させたい、という意図に基づいて建設された（グロード 1996: 115, 109, 川井 2002: 57）。このようにして旭ヶ岡の家は、特別養護老人ホームから総合施設へと発展した。

また旭ヶ岡の家は、ボランティアの家族に入浴サービスへのニーズがみられたこともあり、1977（昭和52）年から自主事業として、そして1980年代には市の委託事業として、地域のねたきり高齢者に入浴サービスを提供するようになった。それ以外にも、自主事業の経験を経て委託事業としてデイサービスを実施し、函館で初めて介護型ヘルパー派遣事業や在宅介護支援センターの運営にも取り組んだ。デイサービスも介護型ヘルパー派遣事業も、最初は行政からの財政援助なしに、後援会からの資金援助で開始し、その実践の蓄積や実績が認められて委託事業になったことも、興味深い。また1996（平成8）年の春に複合型の在宅サービスセンターのベレル（「おいしい空気」という意味）が設立され、その後はターミナルケアにも取り組むようになった。オンブズパーソンへの取り組みも、目安箱から始まり、試行を経て1997（平成9）年から高齢者福祉オンブズマン会議が発足して、函館市内の法律事務所に事務所をおき、知的障害児施設と合同でオンブズマン会議を開催する、という工夫も行われた。1998（平成10）年には「高齢者人権憲章」を發布した（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 244-5, 247, 252, 258, 220-1, 223, グロード 1986: 36, グロード 1996: 195, 101, 川井 2002: 138, 53, 158-60）。

## II 専門性の高さと文化活動

### (1) 専門性の重視と向上

キリスト教社会福祉の欠点として「専門性の低さ」が指摘されることが多いが、旭ヶ岡の家は「優しさだけではお年よりは守れない」というグロード神父のことに象徴されるように、専門性を重視し、ケアの水準の向上に取り組んだ。旭ヶ岡の家が設立されるとグロード神父自身が、この仕事は教会の仕事をやりながらでは無理だと思って教会を辞め、寮に住み込む、という徹底ぶりであり、国内で参考になる実践が少ないなかでバチカンや国連の協力を得て世界の老人ホームから学び、施設としての専門性を向上させた。教会時代からの知り合いに囲まれてスタートしたが、当初は専門性が十分ではなく、右も左も分からない状態だったため、感性を土台としつつ、多くの研修プログラムを重ねて専門性を向上させた。1992（平成4）年ころから認知症について勉強会をおこない、認知症の高齢者には、異常と思われる行動に焦点を当てるよりも、残された正常な感覚のレベルで楽しみを提供することが重要である、という結論にたどり着いた（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 216, 204, 99, グロード 1996: 47-51, 131, 川井 2002: 105）。

旭ヶ岡の家では、ケアワークだけでなく、ソーシャルワークも重視された。設立時にはシスターがケースワーカーを務めた。その後は入居者の生活を活性化し、文化的な生活を支援するアニメーター（元気をつける人）が配置されている（グロード 1986: 41, 149, 川井 2002: 122）<sup>2</sup>。

### (2) 施設内での文化活動

旭ヶ岡の家では、「ケア」は狭義の「介護」にとどまらず「文化的おつきあい」として、そして老人ホームはリハビリテーション・センターではなく、居心地の良い別荘であり、趣味のセンター、そして夢のカルチャー



センターとして理解されている。趣味のサークルは、23にのぼったこともある。別荘的な雰囲気をお大切にすため、朗読会やナイトクラブなどの多彩なイベントがあり、お年寄りには正装してそれらに出席し、お年寄りによるファッションショーも開かれた。敷地内には北海道らしく、鮭の孵化場もあった（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 185-6, 186, 182, グロード 1986: 4, 138, グロード 1996: 19）。

時にはお年寄りには、「生きがい」ということばは重すぎて、「生きがいを持て」と言われると逆にいじめられるようなので、お年寄りには生きがいではなく、その日その日の明るい気晴らしが必要である、というグロード神父の発想は卓見であり、「文化は火遊びだ」というグロード神父のことばは名言である（グロード 1996: 15-6, 社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 166）。確かに日本の福祉施設の多くは、文化が乏しく、救貧制の残滓がみられる「ただの福祉施設」かもしれない。そのなかで旭ヶ岡の家が独自性を保ち、入所者（「共同生活者」というべきかもしれないが）を確保し続けるためには、個室という「住宅性」と廊下に飾られたグロード神父の絵やボランティア、そして入所者の作品などの「文化の魅力」が鍵となるかもしれない。

### (3) ボランティアとの支え合い

総合施設・旭ヶ岡の家では、おおざっぱには年間5,000人、日常的な実感としては1日に20から30名程度のボランティアが活動している、といわれている（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 158）。この人数自体が、普通の施設と比べると相当多いように思われる。確かに、筆者が旭ヶ岡の家を初めて訪問させていただいた日にも、ボランティアグループが踊りでお年寄りを楽しませている場面に遭遇し、それとは別にボランティアを終えて帰宅する方たちも目にした。

旭ヶ岡の家の設立当初にも、見学者から「慰問のボランティアをしたい」

という申し出があったようであり、グロード神父が主任司祭を務めていた元町カトリック教会の婦人会のメンバーが「カナの会」を作り、施設内の喫茶店の「ボンジュール」を運営することもあった。個人によるボランティアとしては、元函館ドッグ造船所の技術者がボランティアとして住み込み、長寿橋やルルド、遊歩道などを作って、グロード神父の理想を金鍮と鉋とスコップで形にした、という例が、団体としては営林局のボランティアが旭ヶ岡の家を公園化するうえで尽力した、という例が興味深い（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 116, 169-71, 159-60, 162）。

旭ヶ岡の家にこれだけボランティアが集まる一因は、施設としてボランティアの役割について適切に認識していることであろう。グロード神父は、日本ではボランティアというと、職員の数が足りない穴を埋める人たちのようなイメージが強いが、本当に老人ホームで必要なボランティアは、ミニイベントなどで入居者を楽しませる、いわば「芸能人」である、と述べている。そしてボランティアがごく自然に来られるようになるためには、ホームはたえず未完成のかたちをとる必要があり、ボランティアは大歓迎されることでホームに行くのが生活の楽しみになっていた、と記述している。旭ヶ岡の家では、家族会のボランティアやそれ以外のボランティアが参加することによって、施設を密室化させず、ケアの質を向上させるという、ボランティアの正しい活用方法が用いられていた。今日では、ボランティアの高齢化と継続的に呼び込むことが、課題としてあげられている（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 152-3, 172, グロード 1986: 79, 81-82, 86, 89）

グロード神父は、ボランティアの目的と成果、ボランティアコーディネートの方法についても、時には社協のボランティアコーディネーター以上に、的確に理解していたようである。グロード神父によるとボランティア活動は、あらゆる合理的打算とは関係のない、即興的で自発的な人間の精神性の発露にほかならず、お互いに協力しながらもう一つの誇りをもてる

自分の人生を探し出す、そして自発性と創造性いっばいのより明るい人間関係を深めていくことであり、ボランティアでは本人が楽しみながら来られることが大事なので、ボランティアのイメージを、お年寄りとの愉快的関係を作り、もりあげるように変えていかなければならない。ボランティアでは、人が別の人を連れてくることや、楽しみながらできることも重要であり、ボランティアのなかにはグロード神父に会うと心が充たされることもあって、活動に参加する人もいた。ボランティアの募集では、漠然としたお願いではなく、目的と時間、オリエンテーションをはっきりさせて呼びかけることが必要であった（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 154, 164, 155-6, グロード 1996: 145-6, 14）。

#### (4) 地域との交流と文化活動

グロード神父はボランティアにとどまらず、地域との交流も重視した。グロード神父は老人ホームにとって地域との交流が大切な理由について、以下のように述べている。

「老人同士の世界は、なかなか大変なものです。この厳しい老後の審判を緩和するため、お年寄りのもっている良い面を守り引き出すために、老人ホームと地域社会との深い交流をつねに計らなければなりません」（グロード 1986: 39）

そして日本では、老人ホーム自体に魅力が乏しいことにも起因して、地域が老人ホームを嫌がる傾向があるため、老人ホームはもっと地域に働きかけなければならない、と考えて、年に1回ホームの参観日をおこなうようになった。その日には貸し切りバスで、ホームに見学者が来るようである。また、お年寄りがオーケストラを作り、器楽演奏をしたこともあった。そしてフランスではお城で劇が上演されているように、五稜郭で野外劇を

上演することを企画し、文化庁長官と函館市の許可も得て、その夢を実現させた。旭ヶ岡の家は地域交流室を設け、地域交流センターとしての役割を果たしたこともあった（グロード 1996: 153, グロード 1986: 94-5, 99, 150, 川井 2002: 62, 社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 155）。

### III グロード神父について—生い立ちと重要な価値観

#### (1) グロード神父の生い立ち

グロード神父は1927（昭和2）年に、フランス西部のヴァンディ県の小さな村で生まれた。この村には村長自慢の老人ホームがあり、老人ホームとは年をとったらみんなが望んで、競走して入るものだと思われていた。神父はカトリックで、農地をもつ裕福な家庭で育ち、家庭では人に対して親切にすることは神様への態度と同じであることを教えられた。村人は親しく、村には差別や軽蔑はいけないという雰囲気があった。神父は「ボランティアをすることは当たり前のこと」という雰囲気のあるカトリックの学校に入学したが、少年時代にはいたずらもする、暴れん坊でもあった。入学後2～3年目に第二次世界大戦が始まったが、終戦時には高校生だったので戦争には行かず済んだ。バカロレアに通って大学に入り、大学を終えるときに母と洗濯係のおばあさんの甥の影響もあり、神父を志した。規律が柔らかく、派遣後はあまり面倒を見ないといわれていたパリ・ミッション会に入り、大神学校修了後に日本に派遣されることになった。日本の美術に感動した神父は、日本への派遣を喜んで受け入れた（グロード 1996: 33-41, 社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 29, 31）。

グロード神父は1954（昭和29）年来日した。当時の日本には戦後の貧乏が残っていたものの、復興へのエネルギーもあり、教会も若者でにぎわっていた。来日時には神父もまた、27歳であった。最初は八雲町に赴任し、その後函館に来て、主任司祭として15年間働いた。通常司祭は、

数年単位で司牧する教会を変わるが、グロード神父は任地について深く知るために、同じ場所にいることを選択した。この選択もまた、旭ヶ岡の家ができることに、プラスに作用したかもしれない。当時の函館には、樺太からの引き揚げ者がいて、生活保護受給者が多いなど、戦争の爪跡と貧困が残っていた。グロード神父の前任者は市役所と連絡を取り、福祉活動に参加しており、グロード神父も生活が困難な世帯を30件ほど受け持ったこともある（グロード 1996: 41-7）。

グロード神父は老人ホームの建設を依頼された時の想いについて、以下のように語っている。

「布教活動というのは、直接に、そして具体的に、人を助ける運動からはじめなければダメだと常々考えていたから、近い将来、函館のためにもっとも必要になるのが老人ホームだと言われれば、そのときはまだ漠然とだったけれど、将来そうしたほうがいいかな、と思った」（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 26）

このキリスト教の布教と社会福祉のかかわりについては、キリスト教についての知識の伝道を重視するのか、愛の業を実践して神の愛を伝える、パントマイム的な行為も布教に含めるのかという、重要な論点が含まれている。この点は、修道院による慈善活動を経験し、ボランティアな団体による多元主義的なサービスの提供を容認し、行政は補完性の原則に基づいて民間を尊重するカトリック国ではそれほど議論にならなかったかもしれないが、日本のプロテスタントでは論議を招いたようである。本稿ではこの点について掘り下げるだけの紙幅はないが、このようなグロード神父の思想とおこないがあったから、キリスト教を知らない入所者も神父が好きで信頼し、「神父は宗派を超えている」と評価され、神父がホームに人を引っ張る「パブリック・リレーションズ」の役割を果たせたのではないか

と推察している（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 94, 166, グロード 1996: 152）。

## (2) グロード神父の重要な価値観

上述のような考え方もあってか、グロード神父は職員に、お年寄りには絶対ミサへの参加を強制してはいけない、と訓示したことがある（社会福祉法人函館カリタスの園 2002: 81）。これは布教も大切だが、それ以前に個人の人権の尊重が重要である、という価値観の発露ではないかと推察される。筆者には、いたずらやユーモア、好奇心、芸術なども含めて、グロード神父の価値観全体についてふれることは困難なため、以下では社会福祉実践にかかわる「重要な価値観」に限定して、考察してみたい。

グロード神父は高齢者福祉の実践において、本人の自己決定と可能性を生かし、利用者の尊厳を守るという、今日の社会福祉援助技術論に通じる価値観を重視していたようである。このような価値観があったからこそ、キリスト教社会福祉のなかでも、保守的・非近代的で専門性が乏しい存在になるのではなく、専門性を向上させ、地域ともよい関係を築くことができたのかもしれない。そして神父ゆえ、人権についての解釈はキリスト教的である。グロード神父は、日本では人権イコール個人主義と解釈する人もいるが人権には憲法よりも深い根拠があり、人間の霊的な魂は自由と切り離せず、社会の都合で左右されていい対象とみなすことは許されないと述べ、人格主義が人権の基礎であり、人間一人ひとりの尊厳は個人の精神性の謎に基づいていることを強調している（グロード 1996: 62, 60, グロード 1986: 52, グロード 2000: 10-3）。

グロード神父は本人の自己決定と可能性を生かし、利用者の尊厳を守る、という価値観をもっていたため、高齢者の拘束やねかせぎり、薬の乱用、老人ホームに入所するための待機期間の長さ、家族介護の限界にもかかわらず家族任せで、ケア付きアパートを増やさないまま在宅福祉をすすめる

などの、日本の医療や福祉の問題点を指摘してきた。ただし筆者は、グロード神父の価値観だけではなく、海外の先進的な高齢者福祉実践から最先端の知識を学び、「外からの目」が伴っていたことも重要だったのではないかと、推察している。1982（昭和57）年のカリタスジャパンによる海外への派遣以来、グロード神父たちは海外での研修旅行を重ねて日本の施設の問題点に気づき、自らの専門性を高めてきた。旭ヶ岡の家が発行した数多くの海外研修の報告書は、その証しであろう（グロード 1996: 83, 180, グロード 1996: 118, 72, 205, 197）。

グロード神父の人権感覚と「外からの目」は、日本の経済中心の社会構造や文化へのアンチテーゼも示している。

グロード神父は「労働、仕事は、人生の目的そのものではなくて手段である」と述べ、日本に来て厳しく、窮屈だと感じたこととして、年中、社会全体が一服する余裕をもたないことをあげている。そして人間の生きる目的は幸せになることであり、本当に幸せになりたければ、自分の幸せだけでなく、他人の幸せも求めなければならないが、日本では国や団体の繁栄が目的になり、会社は儲けて人を酷使して、仕事そのものを誇りにしている、と指摘している。日本の文化の中には、社会のために働けなくなった人に「我慢しろ」という「スパルタ的」な思想がある、という指摘は「競争社会におけるマイノリティへのまなざし」という観点から、非常に興味深い。神父はまた労働と生活のなかでも、「お金を払うことが嫌い」と「お金への執着」という、日本人の金銭についての考え方の貧弱さをあげ、日本はもっと国民一人ひとりの暮らしに国の豊かさを反映させることができる、と指摘している。グロード神父の言うように、「夢や遊びを大切にすることも生活を豊かにし、「型を破る」ことも大切なかもしれない（グロード 1986: 144, 49, 3-6, グロード 2002: 11, グロード 1996: 13, 58, 14, グロード 2000: 94）。

上述のような日本社会についての指摘の根底にはフランス人の人生観や

価値観があると思われるが、福祉観、なかでも「行政と民間の役割」についても、フランスの社会観や福祉国家観を垣間見ることができる。以下にあげたグロード神父の指摘は、スウェーデン、そしてかつてのイギリスのような、行政が公的責任に基づいてサービスを提供する福祉国家像とは独自の、補完性の原則に基づいて民間によるサービスの提供を尊重する、フランスやオランダ、ドイツのような福祉国家像に基づいていると思われる。

「行政は社会の事務局にすぎないもので、国民の生活はなるべく国民で考え、背負うべきものなのです。行政は、国民の努力、国民の出し合っている税金などを、より能率的に、より公平に活かす調整機関であって、方針とか運営については民間の自主性を尊重すべきです」  
(グロード 1986: 196)

補完性の原則に基づいた福祉国家ではローカリズムに基づいた「分権」が尊重されるのに対して、日本では民間部門の力を借りなければサービスの提供が困難なのにもかかわらず、「補完性の原則」は市民権を認められず、「官」主導の集権的な体質が残されている。グロード神父は、日本社会の中で福祉の地位が低く、スペシャリストが少なく、スペシャリストではなく事務職の行政職員が福祉を担当し、施設のトップになることの問題点を指摘している（グロード 1996: 123）。

## おわりに—今後の研究課題

以上述べてきたように、旭ヶ岡の家は日本の高齢者福祉の「貧しさ」や救貧的な高齢者福祉観に挑戦し、コミュニティ・オーガニゼーションやコミュニティワークではなく、ボランティアや文化活動を通じて「福祉施設と地域住民をつなげる役割」を果たした。それらがどのようにして函館市



民の「価値観の転換」をすすめたかについては、「それいゆ」のバックナンバーの分析を通じて、仮説を実証し、明らかにしたい。

また本稿の執筆を通じて、文化活動とは文化的なプログラムを指すが、そこには単なる文化ではなく社会構造、経済中心へのアンチテーゼも含まれていることがわかった。今後は、文化活動を通じた当事者と地域住民の人格的な交流が共感と親密圏の形成につながり、地域住民の価値観に人格性、人間の尊厳、連帯が芽生えた時に、「支え合い」だけではなく政策決定にどのような展望が生じるかについて、「公共圏」と「公共性」という観点から、研究を発展させたい。

## 注

- 1 現在特別養護老人ホームは83人定員だが、短期入所枠の7名を加えて母数を90人になると個室の割合は下がる、というご示唆を市毛晋様よりいただいた。また、設立時の定員は70人だが1割増すことができたとのことであった。
- 2 市毛晋様からいただいた資料によると、アニメーターとは「生命や活力、関心、魂を他者にふきこむ人」と説明されている。

## 文 献

- 秋山智久・吉井由佳「現代キリスト教社会福祉実践」日本キリスト教社会福祉学会編『社会福祉実践とキリスト教』ミネルヴァ書房、1998年
- アルフォンス・デーケン、フランソワーズ・モレシャン、フィリップ・グロード『三人寄ればニッポンが見える』1997年、旬報社
- 川井龍介『老いはバカンス、ホームは休暇村』旬報社、2002年
- 社会福祉法人函館カリタスの園法人25年史編集委員会『夢の咲く丘—グロード神父と「旭ヶ岡の家」の25年』2002年
- 田代菊雄『日本カトリック社会事業史研究』法律文化社、1989年
- 田代不二男『社会福祉とキリスト教』相川書房、1983年
- グロード・フィリップ『横町のご隠居たち』YMCA出版、1986年
- フィリップ・グロード『お年寄りに太陽を—SOS日本の老人福祉』労働旬報社、

1996年

フィリップ・グロード『好奇心だよ，好奇心』女子パウロ会，2000年

フィリップ・グロード『日本のお年より—老人ホームの四季』コイノニア出版，  
2002年